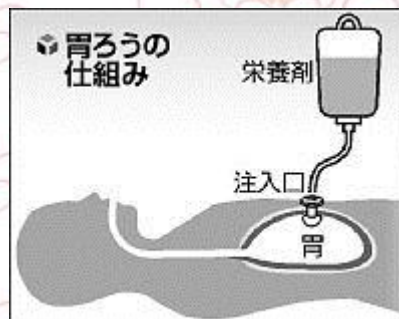


終末『胃ろう』に波紋

胃ろうとは？

おなかに1センチ未満の小さな穴を開けて管を通し、胃に直接、栄養剤を注入する。点滴や鼻からのチューブによる栄養剤注入などに比べ、十分な栄養が取れ、感染症の危険や患者の苦痛が少ない、経口摂取と併用できる——などの利点がある。



日本老年医学会「立場表明」の骨子

- ▶ すべて的人是「死」を迎える際、「最善の医療およびケア」を受ける権利を持つ
- ▶ 「最善の医療およびケア」は、最新・高度医療やケアの技術のすべてをつぎ込むことではない
- ▶ 経管栄養や人工呼吸器などの適応は、慎重に検討
- ▶ 患者の意思確認が困難でも、できるだけ推定し、尊重することが重要
- ▶ 終末期医療では、苦痛緩和とQOL（生活の質）の維持・向上が主体に
- ▶ 終末期には、緩和医療・ケアの技術が用いられるべきである

医療機関の事情

胃ろうは、栄養状態の改善効果が高く、つけることによって体力が戻り、再び口から食べられるようになるケースもある。

ただ、これだけ普及した背景には、医学的理由だけでなく、経営の面から入院日数を短縮したい医療機関側が、まだ口から十分に食べることができない患者を早期に転院させるために胃ろうを作ったり、食事介助の手間や誤嚥のリスクを嫌う介護施設が、入所者に勧めたりするケースも多いとされる。

「胃ろうをつけて、本当に良かったのか」。 埼玉県の女性（74）は、入院中の夫（78）に会いに行くたび、こんな思いにとらわれる。

4年ほど前、認知症と診断された夫は、徐々に食事を取らなくなり、2年前に入院。

主治医から**「胃ろうにしないと死を待つばかり」**と言われ、女性は承諾するしかなかった。

地域の世話役を務め、社交的だった夫。今はほぼ寝たきりで意思表示もできないまま、人工的な栄養によって生きながらえている。

「夫は幸せを感じているのか。本当に生きていたいのか」と、女性は悩む。

食べられなくなった時、胃ろうをつけるのかどうか。高齢者の終末期医療において、医師や家族が直面する大きな課題だ。

以上 平成24年2月3日（金）読売新聞より抜粋

今回、この記事を取り上げた理由は、以前風の里のご利用者様が入院中、胃ろうの選択を迫られました。

胃ろうの選択を考えた場合、賛否両論あると思います。しかし、大切なご家族を思いやる気持ちは、どちらを選択したとしても、間違っていないでしょう。

風の里グループホームでは、現在胃ろうの方の入所できません。

ご本人らしさをいつまでも大切に、尊厳ある最期を迎えて欲しいと改めて感じさせられました。

私たちは、この思いを念頭におき、ターミナルケアに取り組んでいきたいと思ひます。